

THE AMERICAS TODAY



天理大学アメリカス学会ニューズレター

NO. 63

2010年10月

Special to the Newsletter

プロセスとしての出会い、あるいはその解剖学

加藤 隆浩

不意に何かと出くわす。知っている事物であれば、少し驚きはしても、「あ、〇〇だったのか」で済む。しかし、経験したことない事物、事象だと話は別だ。自分の持っている知識と経験知を総動員し、それらをやりくりしながら、目の前のものが何であるかを推理、分析し、一応、納得のいく結論——正否のほどはともかく——を引き出すまであれやこれやと思案する。行動するのは、たいていその後だ。

人間は、分からない事柄を分からないこととして不明なまま放っておくのがとかく苦手な生き物である。これは、現代人だけでなく、先史時代、歴史時代の人間を問わず、場所も、日本、欧米のみならず、世界中どこでも共通である。カッシーラやランガー流に言えば、人間は、シンボルを操作することで、ものを認識するだけでなく、解釈の可能性を欠くことに起因する精神的・情緒的混乱を排除するために自らが会おう環境に何らかの意味を付与しようとするのである。

閑話休題。アメリカスを解く鍵は「出会い」である。こんなことは、おそらく誰もすぐ思いつくだらうから、もはや二番煎にさえならないかもしれない。しかし、三番煎、四番煎、いつそ「手垢まみれの言い草」というそしりを受け入れる覚悟で言ってしまうえば、アメリカスの社会や文化は、さまざまな「出会い」の歴史とその結果の連続によって形成されてきたと表現してもよからう。

そもそも、アメリカスの人類史は、ユーラシア大陸に居住していたモンゴロイドが、後に分断されるとは知らないでアメリカ大陸に向かって歩き出し、大地と出会い、そこに第一歩の足跡をつけたところから始まる。モンゴロイドはその後、南下し東西にも拡散しながら新たな環境と出会い、各々の地域に適応していく。氷河期がひとまず終わり、アメリカスに取り残されたモンゴロイドの拡散がひとまず落ち着きを見せると、やがてユーラシアから隔絶されて生まれたアメリカ先住民は、今度は、もと地続きだったヨーロッパの民と、カリブ地域、南北アメリカで再会することになる。そして、その際、アフリカ大陸出身の人々も出会いに加わる。以後、欧州やアフリカ、アジアから植民、強制連行、また、移民といった人の波が寄せては返し、アメリカスの歴史はその都度、厚みと複雑さを増していくことになった。近年、新たな現象として、

アメリカス内部の「南から北へ」のラティーノの動きが活発化し、新たな出会いが生まれ、多様性の上にさらに別の多様性が塗りこめられ、より複雑な様相を呈すようになった。

以上、歴史の流れを大雑把に鳥瞰しただけでも、あまたの出会いが次々に繰り返され、そのたびごとに、歴史の断片が作られてきたことが分かるが、では、この出会いとは一体どのようなものなのだろうか。ここで、話は冒頭に戻る。

出会いは、仮に出会う対象、相手について予備知識がある時であっても、あるいはそれについてすでに熟知していたとしても、それは本質的には未知のものとの対峙、遭遇に等しい。たとえば、よく知っている筈の自由の女神像。写真やビデオ、書籍でそれについてどれだけ多くの情報を得ていたとしても、あるいは、すでに幾度となく訪れたことがあるとしても、その前に改めて立ってみると、均整のとれた崇高な審美性に今さらながらに驚かされる。しかも脳裏には、それだけにとどまらず、それがフランスから贈られた経緯、そこに込められた理想、さらには米国がこれまで辿ってきた歴史、果ては、映画『猿の惑星』や『インデペンデンス・デイ』で隠し味のように挿入されていた「破壊された自由の女神像」のイメージの寓意などが次から次に湧き上がってくる。喚起される個々のテーマが、さらに個別にさまざまな事柄を連想させ、152フィートのこの像は、それによって現出される多種多様なイメージや脈絡に即して、それと出会う者の認識を深化させ、時にはそれを根底から覆すような形で変化させていく。要するに、出会う対象を仮に熟知していたとしても、はたまた、仮に出会いがマンネリとなっていたとしても、認識はそれでもなお、その都度再構築されるか、あるいは、改変の可能性を少しは残しているというわけである。

素姓の知れたものとの出会いですらそうした喚起力をもつのであれば、未知のものとの対峙は、冒頭に述べた通り、情報の欠損している分、出会う者の脳に底知れぬ不安を増殖させる。しかし、それを感じない場合が多いのは、不安が脳みそを支配する前に、認識という仕掛けがフル回転しその鎮静化に向けて全力を注ぐからであるが、われわれ人間は、己の中で生起するその心的プロセスの存在になかなか気付かないだけのことである。逆にいえば、認識のプロセスが段取り良く進まず、不安の鎮圧というストッパーが機能不全を引き起こし、心的混乱が生じてはじめて、その仕掛けの重要性に遅まきながら気づくといった具合である。

このようなことを、なぜつらつら考えているかという、もう二昔以上も前、つまりコロンプスのアメリカ大陸到達500周年を受けて、他者認識の議論が一種のブームとなり、筆者としては、その後の展開に大きな関心を寄せていたのだが、1992年が終わると、そのテーマはすぐに風化し、その熱気は元から何もなかったかのようにすっかり萎んでしまったからである。なるほど、500周年を機に「出会い」をキーワードとしてヨーロッパ人とアメリカ先住民とがお互い相手に何をしたか、それが権利とか人権とどのように関わったのか、あるいはもっと基本的には、文化的・物質的にいかなる交流があったか等々が詳しく解明された。しかし、残念に思うのは、「出会い」があれば、それは、世界のどの地域、いかなる民族であれ一律に、あたかもならん反発も緩衝作用もなくすんなり受け入れられてしまったかのような論調、言い換えれば、「出会い」をそのまま「受容」「次の行動」と結び付け、「出会い」をそうした自動連鎖の中で分析するという荒っぽい手法が多かったように思えるからである。分かりやすい例を引けば

新旧大陸——本来なら「新旧」大陸とすべきだが、その意味するところはすでに専門家の間では共有されていると考えるので、ここでは煩雑さを避けるため括弧なしにしている——の産物の交流である。ヨーロッパから牛や馬がアメリカスへ、他方、その逆のルートでジャガイモなど多くの産物がもたらされた。これは誰もが知っている事実であるが、たとえば、牛馬はアメリカ先住民に同じように受容されたわけではない。

中央アンデス地域の農村では、今でこそ、馬に乗った農民が牛を追って畑仕事に出かける姿がよく見かけられるが、ヨーロッパからもたらされたこの二つの大型獣は、征服期初期のインカ人には、同じように迎え入れられたのではない。彼らの中には、馬が歩いてくるのを見ただけで前後不覚となりパニックを起こしてしまう人が出るほどの馬恐怖症に苛まれていたが、牛に関しては、それと違って変わり牛フェチ——当世流に言えば——とも言い表せるほどの牛好きだった。ところが、インカ帝国からさらに南方に居住するマプーチェ人となると、彼らは、牛よりも馬に関心を抱き、早い時期から馬を武器として入手、すぐに乗馬術を習得し、騎馬隊を組織してスペインからの侵入者と対等、時には本家以上の機動力を発揮して彼らを蹴散らすほどであった。

同じものに出会っているのに、インカとマプーチェがまったく正反対の反応を示すのは、まずヨーロッパ産の大型獣への彼らの認識が異なっていたこと、また、その認識に基づいて新しい動物に意味が発生し彼らがそれを生活に取り込もうとしたことと無関係ではない。認識が文化的に作られたものであり、それが事物の意味付けに大きく関与することをもっと明確に示す事例は、新大陸からヨーロッパに向かったジャガイモである。

このよく知られた根拠は、南米ではイモつまり食用植物としての役割が最重要であったが、それが欧州に移植されると、それは当初、畑ではなく花壇に、食用のイモではなく、淡い香りを放つ可憐な観賞用植物として王侯貴族に珍重された。一般にヨーロッパ人は、聖書に記載のない植物、食用部分が地中で育つ植物など、悪魔の仕業か、不潔な植物としか映らなかつたからである。つまり、ヨーロッパ人のジャガイモに対する認識は、彼らの中で育まれた伝統——キリスト教的世界観が大きな役割を果たしているであろうが——に裏打ちされた意味体系に照らして作られ、ジャガイモはそれに応じた意味を付与され生活に取り込まれたのである。

例を挙げればきりが無い。アステカやインカの王がスペイン征服者を白い神の再来と見たという史実に関する研究は数多い。しかし考えてみれば、アメリカ先住民が遭遇したのは何も白人だけではないし、ヨーロッパ人が新大陸で「発見」したものは数限りなく列挙できる。ましてや、時代を変え、視野をさらに広げて通観してみれば、アメリカ人類史の幾多の出会いの中で生じた認識と意味付けのプロセスは、日々繰り返行われてきたはずである。

原点(=出会い)をおろそかにすると、そこから遠ざかれば遠ざかるほど誤差は拡大していく——間隔が一定にズレていく「ボタンの掛け違い」よりも事態はもっと深刻になる——が、その誤差が、社会・文化的葛藤や軋轢、摩擦といったものの原因となる誤解や不信と直結しているとすれば、出会いという原点は極めて重要であり、そのスタート地点に立ち返り、そこで作用する認識と意味付けからしっかりと押さえておくことこそ骨太かつ精緻な研究をしていく上での基礎となるように思われる。

(南山大学外国語学部教授・同ラテンアメリカ研究センター長)

文学の中のアメリカ生活誌 (54)

新井 正一郎

Hawaii (ハワイ) 周知のように、ハワイのニックネームは Aloha State (アロハ州) である。愛を意味するハワイ語の Aloha は、750 年頃に南の島から移住してきたといわれるポリネシア人がさようなら、ようこそ等挨拶に用いる言葉である。俗に太平洋の楽園と呼ばれているハワイ諸島をヨーロッパ人として初めて訪れたのは、イギリス人探検家クック (James Cook) である。アメリカが独立戦争を行った 2 年後の 1778 年、彼は第 3 回目の航海の途中、これらの島を発見し、ここを自らの航海のスポンサーであったモンタギュー (John Montagu) 伯爵こと 4 代目のサンドイッチ伯爵に敬意を表してサンドイッチ諸島 (Sandwich Islands) と名づけた。因みに 4 代目のサンドイッチ伯は、初代イギリス海軍大臣で、アメリカ独立戦争には閣僚中で最もタカ派的な人だったが、私生活では大変な賭博好きの人で、片時も賭け勝負を中断する事を惜しむほどであった。彼が勝負をしながら食べられるように召使につくらせた間に肉などはさんだパンは、アメリカではまもなく独立戦争時の敵である彼の名を冠して「サンドイッチ」と呼ばれ、広がっていった。

一方島名の「サンドイッチ」は短命に終わった。1782 年から 1810 年までの間に、ハワイ島の酋長カメハメハ (Kamehameha) 1 世が、当時頻繁にハワイ諸島を訪れていた捕鯨者の助言で築いた軍事力を背景として、全諸島を統一すると、クックが命名した地名を自分の出身地であるハワイ (Hawaii, 「故郷」を意味するハワイ語 Hawaiki から) に改めたからである。このハワイ王朝は 1893 年までほぼ 100 年間続いた。この間 1820 年までには国際的なフロンティアとして、アメリカ人の関心を集めていた。最初にこの地にやってきたのは、ハワイ産のビヤクダンを中国へ輸出したヤンキー商人たちだ。ビヤクダン貿易は長く続かず、彼らは捕鯨者にとって代った。捕鯨者のなかには島の酋長や住民と親しい関係を結ぶ者もいたが、大半はならず者、酒飲みなど寄せ集めの連中だったので、島民との接触によって死亡率の高い天然痘をはじめとするさまざまな疫病を現地社会にもたらし、原住民の生活の崩壊を早めたことは注目している。

『モービーディック』 (*Moby Dick; or The White Whale*) を書いたメルヴィル (Herman Melville) は、若い頃捕鯨船に乗り込み、3 年近くの年月を太平洋の島々で暮らした。処女作『タイピー』 (*Typee: A Peep at Polynesian Life*) は南太平洋マーケサス諸島での生活体験に基づく小説である。次はその一節。「ハワイとタヒチの最近の急激な人口減少の一部は、婚姻関係の欠如のせいだとされている。(略) ハワイ人やタヒチ人を完全な絶滅へと向かわせる進行度は、いわば複比となって早められているのだ」。

ところで、ハワイ諸島に定住し、その後この地の政治、経済を支配するようになったのは、捕鯨者のあとにやってきた組合派のアメリカ人宣教師だった。彼らは 1820 年頃、ホノルル (Honolulu, ハワイ語で「奥まった港」の意) に教会をつくり、キリスト教の布教を行っただけでなく、土地に家を建てて住み、畑で汗をながしながら作物の栽培を行った。南北戦争が終結した頃には、彼らやその子孫は広大な土地を所有する砂糖あるいはパイナップルプランターになっていた。1875 年にアメリカとハワイとの間で締結された条約で、ハワイ産砂糖が無税でア

メロカ市場に持ち込めるようになると、ハワイに入植したアメリカ人プランターは、ポルトガル人、中国人、日本人など多数の外国人労働者を低賃金で雇い、アメリカ向けビジネスを拡大していった。

ついでにしるすと、砂糖がプランターにもたらしたすばらしい好景気は、捕鯨者との接触でひびが入った原住民の社会を完全に解体した。1887年に上記の条約が改正され、アメリカが真珠湾（Pearl Harbor）に軍事基地建設の権利を獲得すると、アメリカにおける砂糖の特権的市場の恒久化を願っていたハワイの白人プランターは、追い風になるという確信を抱いた。だが予期しなかった事が起こった。すなわち、1890年にマッキンレー関税法（Mckinley Tariff）が改定された折、ハワイ産砂糖に対する特権が削除され、アメリカ国内の砂糖生産者に1ポンドあたり2セントの補助金が与えられることになったのである。その結果、ハワイの砂糖生産者は、アメリカ国内およびキューバの砂糖業者との激しい価格競争にさらされるようになった。アメリカ向けの輸出を基点とする好景気は終わり、ハワイの経済は深刻な不況状態に陥った。

この経済危機に加え、政治危機がハワイの白人プランターたちを揺さぶった。ハワイ人のためのハワイを唱える女王リリオカラニ（Liliokalani）が、1891年にハワイの王位についたのである。1893年1月、彼女が自らを絶対君主にする新憲法に着手すると、プランターらは手にいられた経済的、政治的支配力を失いかねないと思い、ホノルル生まれのアメリカ人であるドー（Sanford B. Dole）をリーダーに仰ぎ、革命を計画する。1893年1月、彼らはハワイ駐在のアメリカ公使スティーヴンス（John L. Stevens）の支援（彼は近くに停泊していたアメリカ海軍の水兵たちに命令をだし、王宮を包囲させた）を得て無血クーデターに成功して、ドーを大統領とする臨時政府を樹立した。

同年2月、スティーヴンズは本国政府に「ハワイの梨はいまや完熟している。アメリカがそれをもぎとる絶好の時期だ」と伝えた。時の大統領ハリソン（Benjamin Harrison）はハワイ併合条約の提案を上院で行ったけれども、彼の任期は1ヶ月ほどしかなかったため、上院は審議を延期した。再度大統領になった次のクリーブランド（G. Cleveland）は、領土拡張主義者だったが、ハワイに派遣し、調査させた特別委員会から「ハワイの住民の多くは併合を望んでいない」旨の報告を受けると、同提案を取り下げ、ハワイの共和国を容認した。ハワイ併合が実現するのは、米西戦争においてアメリカがハワイの軍事上の重要性をはっきり認識した1898年だ。ハワイが州になるのは、それからさらに61年もの歳月が経過した1959年である。

以上考察したように、1890年代のアメリカ議会は、ハワイ獲得の議論で沸き返っていたため、世間でもハワイや南海の島々のことを話題にするようになった。また彼らがホノルルやワイキキビーチという言葉の口にしはじめるのもこの頃である。ハワイのダンス、食べ物、服、家屋を初めて目にするのは1893年、シカゴで開催された万国博覧会においてである。その後すぐ、Joe Kikukuが南国情緒あふれるハワイの音楽を合衆国に紹介、絶賛を浴びた。Laurette Taylorは驚くほど美しい南海を表現した「楽園の鳥」（The Bird of Paradise）と題するメロドラマで人気を博した。

かくして、1890年代のアメリカでは、ハワイというと、パイナップル、やしの木、ウクレレ、フラダンスというイメージができあがっていた。そのひとつであるパイナップル (pineapple) は、松かさを指すオランダ語 pi jnppel を起源としている。果肉が大きな松かさに似ているからだ。この果物がハワイで初めて栽培されたのは、1790年。ドール・パイナップル・ジュースのブランド名で知られている業界最大手のハワイ・パイナップル社は、1920年に前記ドールのいとこ James D. Dole によって設立された。

(天理大学名誉教授)

Essay

ニューヨーク市におけるコリアンタウンの 展開過程と民族関係の再編 —クイーンズ区のフラッシング地区を事例に— 魯 ゼウオン

本稿の目的は、アメリカ合衆国の大都市におけるコリアンタウンの形成とその現状を、国境を越えて移住してきた人々のネットワークという視点にたつて実証的に記述し、それを通じて、コリアンタウンという場所の特性を明らかにすることである。

ニューヨーク市の人口は、2000年現在800万8,278人である。人種別にみると、白人は35.2% (280万1,267人)、ヒスパニックは27% (216万554人)、黒人は24.5% (196万2,154人)、アジア・太平洋系は9.8% (78万3,058人) となっている (2000年センサス参照)。アジア系において中国やインドに次いで、韓人は3番目に人口規模が大きい。韓人の7割 (6万2,130人) はクイーンズ区に、マンハッタン区には7.5% (1万848人) が住んでいる。これらの2つの地域にコリアンタウンが形成されている。マンハッタンのコリアンタウンは、1980年以降に食品雑貨店、旅行社、飲食店、スーパーマーケット、韓人系銀行などが集積して形成された。ここでのエスニック・ビジネスはノンコリアンを相手

とする特徴をもつ。クイーンズのフラッシング地区に、1990年代以降、韓人系の飲食店、スーパーマーケット、キリスト教会等が集中し、多くの韓人が暮らすようになった。このフラッシング地区には、2000年以降に中国、台湾や香港などの華人系の商店が著しく進出し、韓人の店舗は郊外へ移動しつつある。現在、韓人社会と華人社会はフラッシングという場所を共有しつつ、それぞれのコミュニティを形成している。

本稿は、アジア系の移住者が定着する場所としてフラッシング地区を取り上げる。フラッシング地区には、中国人 (大陸系)、台湾人、韓国人、カンボジア人、ベトナム人などがミックス状態で居住している。こうしたフラッシング地区を韓人はどのように捉えているのか、どのような人々がフラッシングに定着するのか、フラッシング地区は韓人にどのような社会的意味をもっているのかを明らかにする必要がある。

フラッシング地区の社会的特性を、1) アジア移民の居住地域、2) コミュニティ地区の側面から把握することにする。まず、第1に、フラッシング地区は60年代と70年代には典型的な白人中間階層の居住地であったが、80年代に入ってから中国系の店舗として青果物店、飲食店、スーパーマーケット等が現れる。

90年代には、中国系移民が所有する店舗は数えられないほど急増し、第2のチャイナタウンやリトル・タイパイと呼ばれている。フラッシング地区には中国系移民に加えて、韓人、インド人、パキスタン、バングラデシュ人も定着している。フラッシングのアジア系移民はそれぞれの視点からフラッシングを自分らのコミュニティと捉えている。フラッシング地区は、中国系移民の視点からみると中国コミュニティであるが、韓人の視点からみると韓人コミュニティである。

第2にコミュニティ地区としてのフラッシング地区の特性をみてみよう。ニューヨーク市のコミュニティ地区とは、1975年のニューヨーク市憲章の改正によって、1977年に発足した一種の住民組織である。クイーンズ区には14のコミュニティ地区が組織されている。フラッシング地区 (Flushing, Whitestone, College Point) はクイーンズのコミュニティ7に属する。コミュニティ7は、クイーンズ区のなかで最も住民人口が多い地区である。コミュニティ7の社会的特徴は、①総人口で白人が41%、アジア系は36%、ヒスパニックも17%であるが、黒人は3%にすぎないこと、②外国生まれ人口は50%であること、③高齢化率は16%であることの3つである。つまり、フラッシング地区は外国生まれの住民が過半数を超えていることから、新着移民者が主に定着する場所であるといえる。

以上のフラッシング地区を韓人移住者の定着過程をコリアンタウンの関わりと中国朝鮮族との民族関係の再編という視点から分析すると、以下の4つの特徴が指摘できる。第1に、フラッシング地区は韓人高齢者が日常的に集まる場所である。韓国よりも米国に愛着を抱く韓人であっても、同じ民族の友人との接点が多い点で、フラッシング地区を必要として

いる。第2に、フラッシング地区は韓国からの留学生や短期滞在者を対象とする下宿・民宿が集住する場所である。主に移民1世が下宿・民宿を営んでおり、とくに留学生の下宿という点で韓国と繋がっている。第3に、フラッシング以外で生活している韓人は、フラッシング地区での移民社会の特徴を同じ民族どうしの競争関係と捉えている。第4に、近年登場した中国朝鮮族は韓人社会と華人社会との中間的な位置を占めている。中国朝鮮族は、主に韓人が営む店舗で働く。自営業主の韓人と従業員の中国朝鮮族という経済的な関係が成立する。自営業主の韓人は中国朝鮮族を同じ民族というよりは、むしろ労働力として捉えている。一方の中国朝鮮族にとってフラッシングは就業の機会を得る場所という意味をもつ。今後、フラッシング地区において、韓人社会と華人社会を媒介する存在として中国朝鮮族の社会的役割が注目される。

以上を要約すると、フラッシング地区は、主に韓人高齢者や移民1世、留学生や一時滞在者、そして中国朝鮮族が混在しているエスニック・タウンである。このフラッシング地区の社会的特性を3つの次元に区分すると、1) ローカルな場所として、同じ民族・家族・親族の関係が優位であること、2) リージョナルな場所として、生活者の立場からコミュニティボードのような地域組織への参画が今後重要となってくること、3) トランスナショナルな場所として、韓国や中国など国境を越えるネットワークが存在していることが指摘できる。今後、ニューヨークのフラッシング地区におけるアジア系移民の流入・定着過程をニューヨーク市という世界都市の新たな地域構造の構築過程と捉えていくことが求められる。

(天理大学国際学部准教授)

Essay

軍事目的に供された聖母像

—社会軍事史に照らしてみた、メキシコの グアダルーペ聖母信仰における一側面—

古畑 正富

本論の目的は、軍旗として供された聖母像を俎上に載せ、社会軍事史に照らしてみた、メキシコのグアダルーペ聖母信仰における一側面を考察することである。その際、庶民信仰に根ざす、フォーク・カトリシズムの性格は十分に理解されなければならない。

たとえば、島原の乱（1637 - 1638年）で翻った陣中旗のごとく、神聖な軍旗によって大義を振り翳す軍勢が、武装蜂起を正当化しながら、自らの士気を高揚させやすかったことは間違いない。興味深いことに、類似した歴史現象は、褐色の肌をもつメキシコのグアダルーペ聖母に発見される。メキシコ独立戦争（1810 - 1821年）の前半において、グアダルーペ聖母がヌエバ・エスパーニャの「守護神」とみなされた点は、19世紀の代表的な自由主義者の一人、イグナシオ・マヌエル・アルタミラーノも認めている。しかし、戦場で醸成される「想像の共同体」（ベネディクト・アンダーソンの研究を参照）は決して形而上学的存在といえなかった。ミゲル・イダルゴ配下の兵士たちが復讐を誓い（ラス・カサスの著述を参照）、グアダルーペ聖母像を軍旗に選んだ事実は、彼らの信仰の中身が現世利益の色彩を濃厚に帯びていたことを示す。実際のところ、まさしく戦場では、生き残りを賭けて勝利が渴望され、群衆の不安を一掃すべく、「勝利の女神」の加護がひたすら期待された。それは、女神ウィクトーリアの像が描かれた、古代ローマの軍旗ウェクシルムを彷彿させる情景であつたらう。

さて、グアダルーペ聖母顕現譚がスペイン

起源の伝承だったことは、よく知られている。結局、メキシコに語り継がれるファン・ディエゴの物語（1531年）は、それを模したものにほかならない。したがって、編集問題を詳細に調べれば、聖母顕現譚の成立は先住民やメスティーソの唱道でなく、むしろクリオーリョ聖職者のキリスト教神学に依拠したことがわかる。この場合、「グアダルーペの四福音史家」（ミゲル・サンチェス、ラッソ・デ・ラ・ベガ、ルイス・ベセラ・タンコ、フランシスコ・フロレンシア）が学問的根拠を与えた、1648年ないし1649年を画期と考えることは可能だろう（山崎眞次他の見解を参照）。そして、こうした状況が、戦乱に明け暮れた、17世紀のバロック的な精神世界を背景に現われたことは注目に値する。

歴史における17世紀の位置づけは、ドイツ三十年戦争（1618 - 1648年）の分析を通して検討されてきたが、同時に、メキシコにおけるグアダルーペ聖母信仰を探るうえでも重要性を増す。C・ヴェロニカ・ウェッジウッドは、ドイツ三十年戦争の前夜、非効率な政治と粗野な日常生活への不満が蓄積し、現世利益による宗教の確かな保証を求めて、神秘主義の動きが加速されたことを指摘する。それによると、神学論争に対して、すべての階級の関心が集まり、聖人崇拜が、以前の諸世紀に比べられないほどの高さに達した。不規則で歪な形にもかかわらず、奇蹟譚は再び、希望をもたらす燈火と目されたのである。また、近世ヨーロッパでは、核家族を主流とする家族形態が社会思想のなかで定着するにつれ、カトリックのマリア神学（Roman Catholic Mariology）もその傾向に順応していった。聖母マリア崇拜は12世紀以降に広がりはじめたけれど、近世で新しく浮き彫りになる概念は、聖家族における母性の勝利であり、仲介

者マリアの効験を中心に聖母の本質が解釈された結果、戦争における母子の結合が改めて強調されるという波及効果を生んだ。それゆえ、古代から点々と続く戦場の風景が人々の意識のうちに忍び入り、やがて「新しい皮袋に古い酒を盛る」かのような様相を呈したことを、我々は忘れるべきではない。

かくして、ドイツ三十年戦争が宗教戦争として開幕したとき、乱世の時勢に後押しされ、聖母マリアの軍旗は諸侯とともに戦場を移動した。だが、ネルトリンゲン会戦（1634年）のあたりから、スペイン兵は戦いの勝鬨を変えてきたという。菊池良生は、この国際紛争を近代の序章と捉え、次のような考えを述べる。「それまではカトリック普遍主義を表すように、スペイン兵の合い言葉は『サンタ・マリア!』であった。それが徐々に『ビバ・エスパーニャ（スペイン万歳）!』になってきた。これは、スウェーデン軍、皇帝軍、フランス軍でも同様であり、後のナショナリズムがヨーロッパの大地に種蒔かれたと評することができる。ドイツ三十年戦争後、ヨーロッパは絶対主義時代に入り、ウェストファリア・システムで画定された支配領域を国民国家、すなわち近代国家へと移行させた」。要するに、聖母マリアの戦闘モードは、国民国家の誕生に併せ、近代国家の国旗と祖国観念に繰り込まれてゆく。ただし、国民国家の基礎に家族国家が潜在する構造から、「産む母」と「戦う兵士」の二重奏が雲散霧消することなく、とりわけ戦時下で、国民統合の象徴たる母性のイメージ（軍国の母）が駆使された記憶は、我々にとって今なお鮮明である。

エンリケ・クラウセによれば、メキシコ独立戦争は「中世的要素を含んだ革命」として、あるいは後期中世～近世における「宗教的熱狂の残映をとどめた起兵」として看取される。

だからグアダルーベ聖母信仰を把握するため、本論があえて提示したのは、母性への思慕がしばしば軍事目的に転化されるという認識である。17世紀にグアダルーベ聖母顕現譚が形成された後でさえ、司祭セルバンド・テレサ・デ・ミエル（1763－1827年）の説教が波紋を引き起こしたとおり、その信仰は神秘主義の底知れぬ魅力を湛えつつ、ヌエバ・エスパーニャの民心に多大な宗教的影響も及ぼした。やはりグアダルーベ聖母こそ、メキシコ独立戦争でクリオーリョ・エリートと下層階級をつなぐ媒体になったことは否めないのだ。時代区分を勘案すれば、メキシコ独立戦争はいまだ近世の段階にあったと判断せざるを得ないが、そこには近代の試練をへて、現在のメキシコ独立記念日で「ビバ・メヒコ（メキシコ万歳）!」と叫ぶに至る、遙かなる歴史の旅路がすでに見え隠れしていた。

（京都外国語大学非常勤講師・
京都ラテンアメリカ研究所客員研究員）

お知らせ

天理大学アメリカス学会は、きたる11月27日（土）9：00から天理大学研究棟第1会議室において第15回年次大会を開催します。2010年はキシコにとって「日墨交流400周年」「独立200周年」および「革命100周年」が重なる記念の年となります。天理大学アメリカス学会はそれを記念して今年の年次大会を「アメリカス世界のなかのメキシコ」と題して、祝賀するとともにさまざまな視点からメキシコを解剖してみたいと目論んでおります。当日は通常のアクティブ・メンバーに加えて多数の参加者が見込まれ、熱い議論が展開されるものと確信いたします。

なお、学会誌『アメリカス研究』を総会当日に会員のみなさまに配布させていただき予定しております。お楽しみにご来場ください。なお、総会後の予定は次のとおりです。

9:30～11:15 <歴史のなかのメキシコ>

(司会：初谷譲次)

①立岩礼子(京都外国語大学准教授)「メキシコ独立に対するスペインの反応——1821年の新聞報道を中心に——」

②牛島万(天理大学アメリカス学会特別研究員・慶應義塾大学非常勤講師)「メキシコについてのテキサス領有問題——米墨戦争原因論との関連で——」

③林美智代(関西外国語大学教授)「近代における統治と先住民共同体」

④柴田修子(天理大学非常勤講師)「記憶の歴史化をめぐる一断章」

11:30～13:15 <文学のなかのメキシコ>

(司会：片倉充造)

①太田靖子(京都外国語大学非常勤講師)「日本に向けられたメキシコ詩人たちの眼差し——タブラーダ、レボジェード、マプレス、パスの場合——」

②高林則明(京都外国語大学教授)「胎動はらむ地方社会の現実とポリフォニー：ヤニェス『嵐がやってくる』(1947)」

③田中敬一(愛知県立大学外国語学部教授)「ロサリオ・カステリャノスの小説世界に見るポストコロニアル」

④片倉充造(天理大学国際学部教授)「ルベン・ロメロの後期作品でたどるピト・ペレスと『ドン・キホーテ』——ピカレスク文学の踏襲と刷新——」

14:15～15:15 <記念講演>

加藤隆浩

(南山大学外国語学部教授・同ラテンアメリカセンター長)

15:30～17:45 <パネルディスカッション：アメリカスのなかのメキシコ——アメリカスという地域概念は可能か——>

(司会：山本匡史)

矢持善和(天理大学国際学部教授)

野口茂(天理大学おやさと研究所准教授)

森田成男(天理大学アメリカス学会会員)

記念講演をしていただく加藤隆浩(かとう・たかひろ)先生は南米アンデスの社会・文化的変化をテーマに、特に宗教現象の生成と消長過程に光をあてておられます。多数の欧文/和文論文を執筆されており、内外の学会において高い評価を得ております。近年では、『ラテンアメリカの民衆文化』行路社(2009年)を編集・執筆されています。また、本ニューズレターに格調高い巻頭言をいただきました。

編集後記

地球温暖化という現象を実感せざるをえない暑い夏でした。ようやく秋らしいさわやかな日々を迎えておりますが、学問の秋、総会では熱いバトルが展開されるものと楽しみにしております。

◇当学会の年会費は一般会員は、5,000円です(入会金はありません)。なお、一般会員とは別に、賛助会員を募集致しております。賛助会員の会費は年1口3万円です。

天理大学アメリカス学会に関するお問い合わせは下記へお申し出ください。

天理大学アメリカス学会ニューズレター

(No. 63 : 2010年10月26日発行)

発行者：片倉充造

〒632-8510 天理市杣之内町1050

天理大学国際学部外国語学科英米語専攻内

天理大学アメリカス学会

電話：0743-63-9076

Fax：0743-62-1965

e-mail: tuaas@sta.tenri-u.ac.jp

http://www.tenri-u.ac.jp/tngai/americas/